

Title	胃腺窩上皮型癌の意義 : その組織発生と未分化型癌との関係
Author(s)	石黒, 信吾
Citation	大阪大学, 1987, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35751
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・(本籍)	石 黒 信 吾
学位の種類	医学博士
学位記番号	第 7841 号
学位授与の日付	昭和62年8月3日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	胃腺窩上皮型癌の意義 —その組織発生と未分化型癌との関係—
論文審査委員	(主査) 教授 北村 旦
	(副査) 教授 森 武貞 教授 松本 圭史

論文内容の要旨

〔目的〕

胃癌の組織型は、一般に腸型とされる腺管を形成する分化型と、胃型とされる腺管を形成しない未分化型とに分類される。前者は、小腸上皮に類似した性質を有し、胃粘膜の腸上皮化生を基盤として発生したと考えられ、後者は、胃固有粘膜に類似した性質を有し、胃固有粘膜から発生した癌とされている。しかし現在までに、腺管形成をするにも拘らず、胃固有の粘膜上皮から発生したと考えられる癌についての報告はほとんど見られない。一方、分化型の腺癌の中には、細胞異型、核異型の強い小腸上皮に類似する癌（以下I癌）と、構造異型はあるが細胞異型、核異型に乏しい腺窩上皮に類似する癌（腺窩上皮型癌、以下F癌）があり、F癌と未分化型の癌との混在が少なからずみられる。本研究は、F癌を定義付け、この癌が胃固有粘膜上皮から発生し、しかも未分化型癌（以下S癌）の発生に関与する可能性を知るために行った。

〔方法ならびに成績〕

材料は、胃癌手術例のうち、直径が10mm以下の癌、114例122病巣と、11mm以上20mm以下の癌、240例255病巣の合計377病巣を用いた。組織形態学的検索は、H.E染色で、I癌、F癌、S癌を分け、粘液組織化学的には、PAS, alcian blue, PAS-alcian blue染色を施し、さらに酵素抗体法（PAP法）による、CEA, lysozyme染色を行った。臨床病理学的には、性別、年齢、癌の占拠部位を検討し、組織学的に、病巣周辺の粘膜上皮の腸上皮化生及び胃底腺の有無、程度を検索した。なお、対照例として胃癌手術例2717例を用いた。

F癌の組織形態学的な特徴：F癌は、腺管を形成する癌であるが、I癌に比べて、核異型は軽度だが

構造異型が強く、それゆえに癌と診断しうる胃腺窩上皮類似の癌であった。この癌は、粘膜内で、腺管の深層部では、構造異型が強く、表層部では、非癌の腺窩上皮に酷似する腺管の極性を有していた。腺管形成は、不完全で、腺管相互の癒合が強く、星芒状に鋭角の突出を示す腺管の分岐が見られた。腺管を形成する細胞は、背の低い円柱上皮よりなり、核は、類円形で異型性は少なく、重層化はなく、細胞の極性は保たれていた。また、刷子縁は著明でなく、杯細胞は無いが有っても痕跡的で、パネート細胞は殆ど見られなかった。粘液染色では、大多数の症例で、癌細胞の粘液は、PAS陽性の中性粘液であった。PAP法で、CEAは、癌腺管の表層部に陽性で、lysozymeは、深層部に陽性であり、H.E染色で見られたのと同様に染色上の腺管の極性を認めた。これらの所見は、非癌の胃固有粘膜または印環細胞癌に見られる所見と類似しておりI癌とした症例では見られなかった。

癌の組織型分類：10mm以下の癌122例の組織型は、I癌63.8%、F癌12.4%、S癌7.4%、S癌+他の組織型8.2%、I癌+F癌4.1%、I癌かF癌か不明の癌4.1%であった。また、S癌と他の組織型が混在する症例では、全例にF癌が含まれていた。11mm以上20mm以下の組織型は、I癌53.0%、F癌7.5%、S癌14.9%、S癌+他の組織型12.5%、I癌+F癌3.9%、I癌かF癌か不明の癌8.2%であった。対照群の胃癌2717例のうち未分化型癌の占める割合は、癌の長径別にみると、10mm以下14%、11~20mm45%、21~30mm40%、31~40mm52%、41~50mm52%、50mm以上57%で有り、10mm以下の癌は、それ以上の癌に比べて有意に低かった。

臨床病理学的特徴：この検討は、20mm以下の癌377病巣のうち、I癌213病巣、F癌34病巣、S癌47病巣で行った。性別で男性の占める割合は、I癌85.9%、F癌88.2%、S癌59.6%であった。年齢の平均値は、I癌60.5才、F癌51.9才、S癌51.4才であり、F癌・S癌は、I癌に比べて有意に低かった。癌の占拠部位の検索で、病巣が幽門前庭部にある割合は、I癌60.6%、F癌38.3%、S癌29.8%であり、F癌・S癌は、I癌に比べて、有意に低かった。癌巣周辺粘膜の組織学的な検索で、腸上皮化生の存在する割合は、I癌76.4%、F癌41.4%、S癌31.8%であり、F癌・S癌は、I癌に比べて有意に低かった。また、胃底腺の存在する割合は、I癌15.5%、F癌41.1%、S癌72.3%であり、F癌・S癌は、I癌に比べて有意に高かった。

[総括]

腺窩上皮型癌は、組織形態学的に胃腺窩上皮に類似し、組織化学的には、胃固有粘膜上皮及び印環細胞と同様の性質をもち、臨床病理学的には、印環細胞癌に類似し、胃固有粘膜上皮を基盤として発生した腺管形成性の癌と思われた。また、10mm以下の癌に於いて、未分化型癌の割合は11mm以上の癌に比べて有意に低く、未分化型癌と混在する癌には、必ず腺窩上皮型癌が含まれており、腺窩上皮型癌が、未分化型癌へ、その組織型を転化させることが示唆された。

論文の審査結果の要旨

本研究は、多数の小胃癌手術例を対象としてなされた、詳細な形態学的、臨床病理学的な研究である。

従来腸上皮化生を基盤として発生したとされる分化型の癌のうち、細胞異型の少ない、胃腺窩上皮類似の癌（腺窩上皮型癌）を見出し、その組織学的な特徴および臨床病理学的な特性を明確にし、この組織型の癌は、従来の見解とは異なり、胃固有粘膜由来の癌であることを提唱している。さらに、これまで疑問の多かった未分化型癌の組織発生に関しても、腺窩上皮型癌が重要な役割を有していることを指摘している。

これらの二つの新知見は、これからの未分化型癌の発育、進展の研究に関する新しい問題提起として評価され、臨床的にも、診断、治療法の選択、予後の検討の面において、重要な課題を提起した点でも注目に値する研究である。